

学 位 論 文 題 名

現代朝鮮語のいわゆる特殊助詞に関する研究

－ 目録の確定の問題を中心に －

学位論文内容の要旨

本論文は、これまで朝鮮語研究者の間でいわゆる「特殊助詞」という名称のもとに一括されて扱われてきた、日本語の「とりたて助詞」に類似した助詞を対象にして、一定の言語学的手順を踏むことによって、「特殊助詞」の内部に含まれていた異質のものを排除し、さらに、「特殊助詞」と見なされた項目の表す意味と機能について記述することを目的としたものである。

「特殊助詞」という名称は、単に「特殊」というだけで、助詞本来の機能を正確に反映したものになっていない。「特殊助詞」に関する先行研究を概観すると、研究者によって挙げている項目に大きな違いがあり、少ないもので 13 個、多くは 23 個にもなる。このような違いがもたらされた原因は、もっぱら意味に関する考察に重点がおかれ、形態や統語的特徴が軽視されてきたという点にある。

本稿では研究者の間に見られる目録の大きな相違に注目し、形態・統語的特徴をも十分に考慮したうえで「特殊助詞」の内部の境界を明確に画定させることによって目録の確定が図られ、さらに、それら明確に確定された一連の「特殊助詞」に対して、豊富な資料を用いた意味と機能との分析が加えられている。

本稿の構成は 5 章からなる。

第 1 章では、本論文の研究目的、研究対象について触れている。

第 2 章では、明らかに特殊助詞から除外されるべき項目について簡単に述べ、本稿で考察すべき項目を提示している。

第 3 章では、特殊助詞の目録から除外されるべき項目について厳密な言語学的手法を用いて分析し、明確に識別した。

第 4 章では、特殊助詞として識別されたものについて分析している。ここでは、同じ形式がいくつかの異なった機能を有する場合、つまり格助詞や並立助詞といった他の品詞とにまたがるものを識別し、そのうえで、特殊助詞と判断される形式が表す意味と機能を詳細に記述している。

① ‘-ㄴ’：‘-ㄴ’は特殊助詞である場合の他に語尾、並立助詞の場合がある。

特殊助詞の場合、名詞に後接する際に、名詞にのみ‘姉妹項目が現われる場合だけ

でなく述部動詞にまで及ぶ場合もあることを指摘している。

② ‘-라도’ : ‘-라도’ は特殊助詞の他に語尾の場合があるが、‘-라도’ が ‘-라고 하여도’ に還元でき、過去を表す接尾辞の挿入が可能な場合は語尾とする。つまり、特殊助詞の場合の ‘-라도’ が目的語の位置に立つ名詞に接尾すると、‘-나’ と同様にその名詞にのみ姉妹項目が現われるのではなく、述部動詞にまで意味が及び、他にもあり得た動作を表すが、これも名詞と動詞の意味上の結合の度合いによって異なることを指摘している。

③ ‘-든지’ : ‘-든지’ には特殊助詞の他に語尾と並立助詞の場合がある。特殊助詞の ‘-든지’ は疑問代名詞に接尾し、普遍数量化を表すが、この場合も ‘-나’ が疑問代名詞に接尾した場合に表す普遍数量化の意味とは異なり、疑問代名詞 + ‘-라도’ が表す条件的な普遍数量化に類似していることを指摘している。

④ ‘-도’ : ‘-도’ には特殊助詞の他に並立助詞の場合と語尾の場合がある。特殊助詞の ‘-도’ は名詞に後接する際、「添加」と「意外」の意味を表すが、特に「意外」の意味を表す場合については ‘-까지’、‘-마저’、‘-조차’ といった他の特殊助詞に置き換えが可能だが、その場合においても ‘-도’ が表す「意外」の意味は「添加」の意味を軸にしていることを指摘している。

⑤ ‘-까지’ : ‘-까지’ は特殊助詞の他に格助詞の場合があり、その際 ‘X 까지 P’ の ‘-까지’ は P との論理的な関係を示すので任意性はなく、文中で ‘X 까지’ は状況語をなすものである。またこのときの X は場所、時、空間を表す語となるが、場所、時、空間以外を表す語の場合であっても P が X の及ぶ範囲や限界を示しているのであれば、‘X 까지’ は文中で状況語となり、‘-까지’ は格助詞と見なされる。

⑥ ‘-부터’ : ‘-부터’ は特殊助詞の他に格助詞の場合があり、その際 ‘X 부터 P’ の X には、時を表す語が現われる。また ‘X 부터’ は文中で状況語となり、このとき ‘-부터’ に任意性はない。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 門 脇 誠 一

副 査 助 教 授 佐 藤 知 己

副 査 教 授 津 曲 敏 郎

学 位 論 文 題 名

現代朝鮮語のいわゆる特殊助詞に関する研究

－ 目録の確定の問題を中心に－

本論文は、これまで朝鮮語研究者の間でいわゆる「特殊助詞」という名称のもとに一括されて扱われてきた、日本語の「とりたて助詞」に類似した助詞を対象にして、一定の言語学的手順を踏むことによって、「特殊助詞」の内部に含まれていた異質のものを排除し、さらに、「特殊助詞」と見なされた項目の表す意味と機能について記述することを目的としたものである。

本論文の成果を簡単にまとめると以下のとおりである。

- ① これまで「特殊助詞」という曖昧な名称のもとに一括されて取り扱われてきたものを一定の厳密な言語学的手法を用いて、境界線を明確に画定し分類した。

「特殊助詞」という名称は、単に「特殊」というだけで、助詞本来の機能を正確に反映したものにはなっていない。「特殊助詞」に関する先行研究を概観すると、研究者によって挙げている項目に大きな違いがあり、少ないもので13個、多くは23個にもなる。このように、もっぱら意味だけに重点をおくという方法を改め、形態や統語的特徴をも十分に考慮することによって分析を行ったことに意義がある。

- ② この境界線を画定したうえで、「特殊助詞」の意味の分析を行っているが、その過程で、これまで分析が不十分だったため、明らかにされていなかった特殊助詞の意味用法に関する数多くの新しい事実を発見した。

- ③ これらの成果は辞書の記述の変更をも要求するもので、朝鮮語学の研究に大きな貢献をしたと言える。

本審査委員会は慎重に審査し、以上の理由に基づいて本学位申請論文が博士（文学）の学位を授与するに十分値する学問的価値を持つものと全員一致して認めるものである。